令和３年度　夏の企画展

義足は語る

～戦争で足を失った戦傷病者の歩み～

開催趣旨

本展は、戦争によって足に障がいを負い、“立つ”“歩く”という行為を義足とともに歩んで来られた５人の戦傷病者のパーソナルヒストリーを見つめるものです。義足は、どのような経緯で作られ、戦傷病者の足となり、最後に当館へやってきたのでしょうか。

兵士の負傷原因は、戦闘行為によって銃弾や爆撃が当たるという直接的なものだけでなく、医薬品の不足によって引き起こされる感染症、行軍中の事故や厳しい生活環境による凍傷などもありました。戦争という過酷な体験の中で、足を失ってしまった方が多くいました。

身体の傷が癒え、治療が終わると、次は社会復帰のためのリハビリが始まります。義足を用いて、立つことから始まり、歩く、そしてその足で生活をし、働く、これらの行為が如何に難しいものであったのか、使用者それぞれの思いと共に労苦を振り返ります。戦争で身体の一部を失う「別れ」の経験、義足という新しい身体を装着する「出会い」、その後の義足と共に歩んだ人生を見つめます。

展示品は、当館に寄贈された義足のほか、身体から取り出された摘出弾、義足が恩賜品であることを示す木箱などです。また、戦争と義足の関係や、皇室から負傷兵に恩賜品として義肢が下賜されるようになった経緯など、歴史的な背景や、現在開発が進められているスポーツ用義足も紹介します。さらに、明治期に総理大臣を務めた大隈重信など著名人の義足とヒストリーや、個人で義足の開発・改良に挑戦した人物についても紹介したいと考えています。

主　　催　：　しょうけい館（戦傷病者史料館）
会　　期　：　令和３（2021）年７月 14 日（水）～9 月 12 日（日）
会　　場　：　しょうけい館１階　企画展示室
入　場　料　：　無料
開館時間　：　10：00～17：30（入館は 17：00 まで）
休　館　日　：　毎週月曜日　＜8 月 9 日（月）開館、8 月 10 日（火）休館＞
内　覧　会　：　令和３（2021）年７月 13 日（火）14：00～15：00

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、会期等を変更・中止する場合があります。
最新の情報はしょうけい館ホームページをご確認下さい。

展示構成

１.戦争と義足

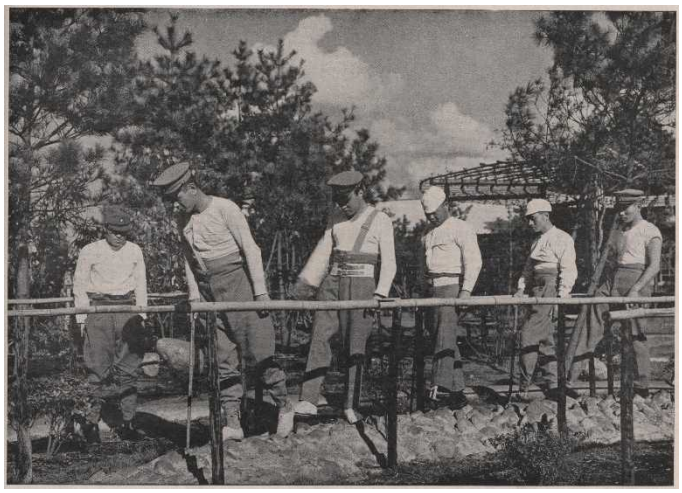
兵士が戦争で足を失ってしまうということはどういうことなのでしょうか。

爆撃により身体の一部が瞬時に吹き飛んでしまった兵士、戦闘中に被弾して傷口から細菌が入り、破傷風やガス壊疽（えそ）といった感染症に罹ってしまい、止む無く切断することになってしまった兵士が多くいました。また、中国東北部やソ連などの北方地域では、厳しい寒さの中での任務で凍傷になってしまい、切断せざるを得なかったこともありました。戦争末期になると、医薬品の不足によって小さな傷でも適切な処置ができなくなり、患部の悪化が進行してしまった結果、足の切断を余儀なくされた人も多くいました。

手足を失った兵士には、陸海軍病院で義手や義足が支給されました。これらの義肢は皇后からの恩賜品でした。

ここでは、戦地で軍医や衛生兵が処置を行った時の様子や、病院で治療・リハビリに励む負傷兵たちの写真などを紹介します。

脚を切断した負傷兵たち
多くは若者でした



義足での歩行訓練
（『臨時東京第三陸軍病院写真帖』昭和 14 年）

２.義足と戦傷病者　それぞれの歩み

ここでは、5 人の戦傷病者と義足の関係を中心に見つめます。本人の経歴のほか、戦場での受傷、切断を余儀なくされた時の状況や、治療とリハビリ、その後の生活について、心境も交えつつ紹介します。

２−１. エピソードⅠ

この義足の持ち主は、1937（昭和 12）年、中国江蘇省の戦闘で右肩と右足を受傷しました。局所麻酔でかかとを残して足の甲から先を切断する手術は、悲鳴を上げるほど痛かったと言います。除隊（退院）後に国鉄へ復職しますが、切断部位には歩くたびに傷ができるので、徒歩通勤が困難になりやむなく退職し、役場へ転職しました。とはいえ、足の痛みは我慢する生活が続きました。

ここでは、義足などのほか、雪国ならではの労苦のエピソード、奥さんへの感謝の気持ちなどを紹介します。

２−２. エピソードⅡ

この義足の持ち主は、1944（昭和 19）年にニューギニア島の戦闘で肩と腕を負傷、その後の戦闘で左足にも重傷を負い、感染症のためジャングルの中で切断手術を受けることになりました。その時の様子を「麻酔のうちうつろの内に骨をきるノコギリの音聞きつ眠れり」と短歌にしました。1946（昭和 21）年に復員しますが、衰弱のため結核にかかり、一時は生きる気力を失くしてしまったといます。しかし家族の存在や恩師の言葉が心の支えとなり、仕事勤めができるまでに回復しました。

ここでは、義足などのほか、戦場の様相や戦友、面倒を見てくれた当番兵への感謝の想いを読んだ短歌や漢詩などを紹介します。

◀ 吸着式ソケット

２−３. エピソードⅢ

この義足の持ち主は、1941（昭和 16）年 9 月、中国湖南省での戦闘中に右太ももに銃弾が当たり、切断手術を受けることになりました。病院に収容されるまでの間に、患部が深刻な感染症に侵されていたためでした。

除隊（退院）後は企業に勤めましたが、「歩くことが大変だから、健常者と一緒に勤めるのが辛かったと」言い、戦後は、実家の農業を継ぎました。終戦後の頃から、切断した脚の激痛に悩まされました。その痛みは「この世の地獄」という程で、効果のある鎮痛剤が手に入ったのは 80 歳を過ぎたころでした。

ここでは、義足のほか、義足で働く姿や家族旅行の写真を展示し、病院の患者仲間や家族とのエピソードなどを紹介します。

２−４. エピソードⅣ

この義足の持ち主は、1945（昭和 20）年に中国東北部で石炭輸送作業中の事故により、両足切断の重傷を負いました。病院に運ばれて事実を知った時、これではこの先何もできないから死んだ方がいいと考えますが、患部が治るにつれ「生き抜かなければいけない」という気持ちに変わったといいます。1947（昭和 22）年に故郷へ帰り、時計修理の技術を習得し、努力の末四年後に時計店を開きました。

ここでは、義足などのほか、家族の支え、時計店開業までの道のり、障がい者福祉団体の役員を勤めたエピソードを紹介します。

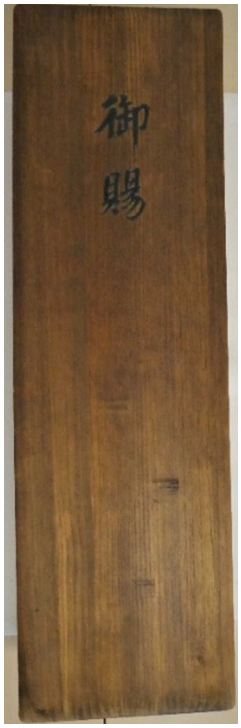
２−５. エピソードⅤ

この義足の持ち主は、1942（昭和 17）年にシンガポールの戦闘で右膝を負傷、太ももから切断することになりました。治療とリハビリの後、義足を支給されました。その頃は若くて体力があったため、義足での歩行にもすぐ慣れ、帰郷後は実家の農業を継ぎました。

ここでは、義足や戦地での写真などを展示するほか、戦後に地域の子供たちに足の切断部分を見せて平和教育に励んだエピソードや、雪道を歩く時に奥さんが先頭に立って義足での歩行をサポートしたエピソードも紹介します。

３.義足の開発と改良―“今”を生きる人と共に―

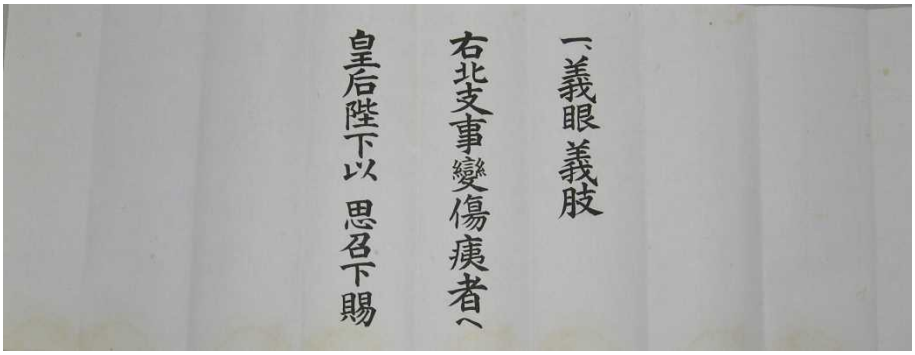
戦傷病者とともに歩んだ義足は、時代とともにより使いやすいように変わっていきました。ここでは戦争に関連する義足の開発と改良の歴史や、恩賜の義肢が与えられるようになった経緯などを紹介します。



義足を納めた箱

戦傷病者ご本人の義足、大隈重信の使用していたアメリカ製の義足（早稲田大学大学史資料センター所蔵）を展示するほか、竹製の義足（川村義肢株式会社所蔵）や戦闘機で使用するための義足（航空自衛隊入間基地所蔵）、個人で開発した義足をパネルで紹介します。

また、現在私たちの身近で日常的に使われている義足、現在開発が進められている義足、パラリンピックで使用されている最新の義足についても、年表と共に紹介します。



沙汰書

映像上映

内　容：企画展に関連する映像を上映します。
日　時：会期中 10：00～17：00（一部上映休止日･時間があります）
場　所：しょうけい館１階 証言映像シアター
その他：鑑賞自由・無料

	映像タイトル	時間
10：00 ～ 11：00	近衛兵の誇りで乗り越えた労苦	17 分
	障害を超えたおおらかさ	10 分
	心の優しさが生んだ義足の苦しさ	20 分
	衛生兵の受傷	10 分
11：00 ～ 12：00	癒えない傷に耐えて	21 分
	夫の両脚となって共に歩んだ人生	24 分
	いつも傷痍の夫を想いつづけて	13 分
12：00 ～ 13：00	家族を崩壊させた戦争を乗り越えて	30 分
	右脚一本、海で生きた軍属	20 分
	人生を変えた一発の銃弾	10 分
13：00 ～ 14：00	誠（まごころ）で守られた命	18 分
	片脚を失くしても前へ進む	22 分
	失ったものを嘆かず、残ったものを鍛える	19 分
14：00 ～ 15：00	支えられた歩み	15 分
	歌声に祈りをこめて	23 分
	二人三脚で六十年余り	10 分
	負けてたまるか！	10 分
15：00 ～ 16：00	九十四歳。おおいに語る傷痍の人生	20 分
	今日あることに感謝　明日があればさらによし	23 分
	義足で、田んぼでも畑でも働いた	10 分
16：00 ～ 17：00	義足と妻に支えられて	24 分
	誠（まごころ）で守られた命	18 分
	近衛兵の誇りで乗り越えた労苦	17 分